

Title	帝政期のザバイカリエにおけるブリヤートへの宣教活動：チベット仏教への対抗と総督府との関係を中心に
Author(s)	竹中, 浩
Citation	阪大法学. 2021, 71(3-4), p. 199-222
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87377
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

帝政期のザバイカリエにおけるブリヤートへの宣教活動

——チベット仏教への対抗と総督府との関係を中心に——

竹 中 浩

一 はじめに

東アジアで植民地支配を行う、あるいは国内で先住民の優勢な地域への入植を進めるヨーロッパの国が、先住民の間に本国（あるいは内地）の文化的影響を及ぼそうとするのは一九世紀後半において広く見られる現象である。その際、多くの場合、本国（あるいは内地）において有力なキリスト教の受容が促進されることになる。この現象を比較史的に見ようとするとき、そこには注目しておくべき点が幾つかある。

第一は、キリスト教の布教に他の目的が結びつけられることである。ヨーロッパの国がキリスト教の伝道を行うとき、福音宣布とともに通常二つのことが意図されている。一つは先住民の啓蒙（文明化）である。通常、ヨーロッパの国にとって、キリスト教を受容することは未開の先住民が文明化されることと同一視される。もう一つはその国の文化を受け入れさせる（同化する）ことである。もとより文化といっても、言語や習慣から法律制度まで多岐にわたり、何をその本質とみるかについて決まった考え方があるわけではない。しかし、ヨーロッパの国の場合、

国内で有力なキリスト教はその国の文化の重要な一部とみなされ、布教を進めることは言語を含めたその文化を受容させることと不可分であると考えられていた。この二つの目的、すなわち文明化と同化は、本来別のことであるにもかかわらず、しばしば意識的にか無意識にか融合させられ、布教に際して同時に追求された。

第二は既存の宗教との対抗である。布教を進めようとする地域に既に別の有力な宗教が存在するとき、それは宣教活動を行う上で障害になる。ロシア帝国東部の場合、大きな成功を収めたヤクト人やアレウト人への布教に比べて、プリヤート人（以下「プリヤート」と呼ぶ）に対する布教は十分な成功を収めることができなかった。⁽¹⁾ その最大の原因は、プリヤート（特にバイカル湖以東に住むプリヤート）にはチベット仏教の影響が広く及び、その生活を支配していたことにある。強力な競争相手の存在は宣教活動を困難にする。それを克服するために、宣教団はしばしば現地行政機関の協力を期待する。しかし、その期待が常に満足させられるとは限らない。特に別の宗教のもとで先住民社会が一定の安定を見ているときには、現地行政機関は先住民の伝統・習俗を尊重し利用して、漸進的・間接的に政治統合を進めようとすることが多い。⁽²⁾ これはしばしば聖職者を苛立たせずにはおかない。ロシア帝国の場合も例外ではなかった。

第三は、布教に伴って生まれ、先住民社会の中で一定の割合を占めるにいたる新しい人的範疇の存在である。布教の結果として、先住民の中に改宗者が現れてくる。また、本国や内地からの移住者と先住民との正式の婚姻によって生まれた子供は、多くの場合洗礼を受けてキリスト教徒になる。このような人々は移住者の社会と先住民社会の間に立つ存在であり、そのアイデンティティは複合的であって、両者をつなぐ媒介になりうるとともに、双方から異質な存在とみなされ、排除されることもある。このような人々をどのように扱うかは、先住民社会の政治統合においてときに難しい問題となる。

このような問題に焦点を合わせながら、本稿では、ヨーロッパ文明の最前線ともいべきロシア帝国・南シベリアのザバイカリエ（バイカル湖以東の地域）におけるブリヤートへのロシア正教会の宣教活動を概観する。その際、最初はイルクーツク主教区の第一副主教（セレンギンスク主教）として、のちにはイルクーツク大主教として活動を指導したヴェニアミン（俗名B・A・ブラゴシラーヴォフ、一八二五―九二年）を中心に置く。ヴェニアミンの宣教活動とそれを基礎づけた思想の意義を、この地域の政治統合との関連において明らかにすることが本稿の目的である。

二 ザバイカリエへの正教伝道

もともとシャーマニズムが支配的であったザバイカリエのブリヤートの間にチベット仏教（俗に「ラマ教 ramajism」と称される）の浸透が進むのは一七世紀後半である。もともとザバイカリエとモンゴルの間には活発な往来があり、モンゴルやチベットのラマは妨げられることなくこの地方に入ることができた。モンゴルから入ったチベット仏教は遊牧民であるブリヤートの生活様式によく馴染み、シャーマニズムと融合しつつ、ブリヤート社会に定着していった。ザバイカリエのロシア国家への併合が進む一七世紀末には、既にこの地にはチベット仏教の影響が広がっていたのであり、その点で、同じくブリヤートが多く住む地でありながら、チベット仏教の影響が弱く、依然としてシャーマニズムが優勢であり続けたバイカル湖以西の地域との間には顕著な違いがあった。

一七二七年のキャフタ条約によってザバイカリエと清朝統治下のモンゴルの間に境界が画定されると、モンゴル人ラマやチベット人ラマの入国は制限されるようになったが、代わってブリヤートのラマが育ち、大きな社会的役割を担うようになった。⁽⁴⁾ 一七四一年、女帝エリザヴェータによって仏教の布教が正式に認められ、ラマは政府に対

する忠誠の誓約をした上でヤサークを免除されることになった。⁽⁵⁾一七六四年、ザバイカリエ最古の寺院の一つであるツォンゴル・ダツァンの座主がブリヤート仏教界の管長に任命され、バンディド・ハンボ・ラマと称することになった。⁽⁶⁾

一六八一年、ロシア国家の一部となりつつあったザバイカリエに国教である正教を広めるべく、ダウール宣教師が活動を開始する。拠点としてバイカル湖岸のポソリスクに修道院が建てられた。一七〇七年、宣教師団は正式に認可される。⁽⁷⁾しかし、チベット仏教の影響が強かったことから、一八世紀の間、宣教活動はほとんど進まなかった。その一方で、一八世紀中葉、正教会において分離派とされ、迫害を逃れてポーランドにいた古儀式派が集団でザバイカリエに移住してきた。その数は五〇〇〇人未満であったとされるが、その後人口を伸ばし、村を形成した。ザバイカリエに定着した彼らはセメイスキーと呼ばれるようになった。⁽⁸⁾古儀式派の存在は、シャーマニズムの残存やチベット仏教の影響力の強さと相俟って、ザバイカリエの宗教事情を複雑にした。

ザバイカリエにおいて再度キリスト教伝道のための宣教師団設立が構想されるようになるのは一九世紀に入ってからである。当時はヨーロッパでキリスト教文明を広げることへの関心が高まった時期であった。一八一二年二月、イギリスに範をとり、キリスト教宣教のための組織としてペテルブルクにロシア聖書協会が設置された。一八一四年、ミハイル（俗名M・И・ブルドゥコフ、一七七〇—一八三〇年）がイルクーツク大主教になると、ロンドン伝道協会の協力のもと、一二月にイルクーツクに聖書協会の支部が設立される。アレクサンドル一世の許可を得て、イギリス人宣教師のエドワード・スタリブラス（一七九四—一八八四年）らが、一八一九年からセレンギンスクを拠点としてブリヤートに対する宣教活動を開始した。⁽⁹⁾

一八一九年から二二年までシベリア総督を務めたスベランスキーは宣教活動の啓蒙的役割を認め、これに対して

好意的な態度をとった。しかし、彼は宗教の違いにこだわらなかつた。ブリヤートを帝国統治に組み込もうとしていたスベランスキーにとつて、ブリヤートに強い影響を及ぼしているラマに協力を求めるのは当然のことであつた。⁽¹⁰⁾一八二二年七月に定められた「異族人管理規程」は、先住民の自治を尊重しつつ、彼らをロシア帝国の法の枠組みの中に取り込んだ。⁽¹¹⁾この年、シベリア総督管区は東と西に分けられ、イルクーツクに東シベリア総督府が置かれることになつた。

続くニコライ一世の時代、一八三八年にイルクーツク主教（一八四〇年大主教に昇叙）になつたニール（俗名 H・Φ・イサコヴィイチ、一七九九—一八七四年）のもとで正教の宣教活動が活発化する。ニールは仏教研究において顕著な功績を挙げるなどブリヤートの世界に対して深い理解をもち、正教文献のブリヤート語への翻訳に貢献した人である。ザバイカリエでの宣教に対する政府の姿勢も変化した。正教の宣教活動が活発化したことに伴い、一八四〇年、ニコライ一世は宗務院の提案に従つてザバイカリエにおけるイギリス宣教団の活動を停止させた。

受洗したブリヤートは遊牧民でなく定住民として扱われ、通常の税を賦課された。臣民をその宗教によつて区分し、それに基づいて法律婚に制約を設けていた帝政期のロシアは、宗教的な混合婚については厳格な態度をとつていた。正教徒は非キリスト教徒との結婚を禁止されており、両者の間で行われた婚姻は無効であつた。しかし、この制約は宗教によるものであつて人種によるものではなく、改宗さえすれば異人種間の婚姻には法的な障害はなくなつた。受洗ブリヤートとロシア人女性との婚姻により、少なからぬ混血の住民（「メテイス」と呼ばれる）が生まれた。⁽¹²⁾正教を信じる受洗ブリヤートの子孫はカルイムと呼ばれる。

一九世紀の半ばになると、東シベリア総督ムラヴィヨフのもとで、ザバイカリエに対する政治的・軍事的な関心が高まる。一八五一年三月、東シベリア総督の指揮下に、それぞれ三個の騎兵連隊と歩兵旅団から成るザバイカ

ル・カザーク軍団が新設される。一〇月、ヴェルフネウヂンスクとネルチンスクという二つの地区から成るザバイカル州が設置され、П・И・ザポリスキーが初代の軍務知事になった。このとき、行政の中心であるチタが市に昇格した。

チベット仏教に対する監督も強化された。一八五三年五月、仏教界を統制下に置くために「東シベリア・ラマ教聖職者規程」が定められる。寺院の建立やラマ僧の数が制限され、東シベリア総督の監督下に、バンデイド・ハンボ・ラマにブリヤートの仏教界を統括させる体制が作られたのである。⁽¹³⁾ 清の支配下にあったモンゴルとの国境の管理も厳格になり、キャフタなど国境での仏具の取引に対する規制が強められた。⁽¹⁴⁾ ザバイカリエでの宣教に尽力したニールがヤロスラーヴリ・ロストフ大主教になってイルクーツクを去ったのはこの年の一二月である。

一八六〇年にイルクーツク大主教になったパルフェーニー（俗名П・Т・ポポフ、一八一―一七三年）のもとで、一八六〇年代、ザバイカリエの伝道事業が本格化する。パルフェーニーは、宣教活動を強化するために、一八三〇年に西シベリアで活動を開始したアルタイ宣教団⁽¹⁵⁾に倣って、主教区内にイルクーツクとザバイカルという二つの宣教団を開設した。⁽¹⁶⁾ その一つ、ザバイカル宣教団長としてパルフェーニーにより指名されたのがヴェニアミンである。ヴェニアミンはタンボフの聖職者の子であり、一八五〇年にカザン神学大学でマグストルの学位を受けたあと、いくつかの神学校の校長を務めていた。一八六二年五月、彼は主教に叙聖され、イルクーツク主教区の第一副主教、ザバイカル宣教団長になった。宣教団の活動拠点は大主教座が置かれたセレンギンスクのポソリスキー修道院であった。

一八六五年、皇后マリヤ・アレクサンドロヴナの直接の後援のもと、宗務院の管轄下に、帝国東部での正教伝道に対する支援を主たる目的とする正教伝道協会が設立される。⁽¹⁷⁾ 一八六六年、イルクーツク支部が設立され、ザバイ

カル宣教団も国庫から資金援助を受けることになった。一八六八年、伝道協会はベテルブルクからモスクワに移り、⁽¹⁸⁾異族人への宣教活動に豊かな経験をもつモスクワとコロムナの府主教（以下、モスクワ府主教）インノケンティイ（俗名И・Е・ポポフ、一七九七—一八七九年）に委ねられることになった。

インノケンティイは、一八四〇年二月にイルクーツク主教区からカムチャトカ・クリル・アレウト主教区（以下、カムチャトカ主教区）が独立したとき、最初のカムチャトカ主教になった人である。一八五八年五月、愛琿条約によってアムール川左岸がロシア領となり、二月にアムール州が創設されると、カムチャトカ主教座は誕生したばかりの州都ブラゴヴェシチェンスク市に移った。そこで極東の伝道に顕著な実績を挙げたことが認められ、一八六七年、インノケンティイは当時ロシア正教会で最高の地位であったモスクワ府主教になっていたのである。

三 イリミンスキーとシチャーポフ

ヴェニアミンの活動を評価するに際して、比較のために、ヴェニアミンと同様カザン神学大学の出身である二人の人物の思想を見ておく必要がある。H・И・イリミンスキーとA・П・シチャーポフである。

一八六〇年代は沿ヴォルガ地域でタタール人の大量棄教が起こり、中央でそれに対する懸念が強まった時期である。これに対する方策を提案して名を上げたのが、カザン神学大学でヴェニアミンの少し先輩になるイリミンスキーであった。イリミンスキーにとつて、異族人のアイデンティティを決定するのは言語よりも信仰であり、正教を受け入れることによつて生まれる新しいアイデンティティは、ロシア帝国への政治的統合にとつてよい影響を与えるはずであった。そこで彼は、イスラムの脅威への宗教的対抗のために言語の多様性を許容し、異族人の言語（口語）を使つて正教を広めるといふやり方を説いた。⁽¹⁹⁾

イリミンスキーはタタール宣教のためにカザン神学大学でタタール語学習を推進しようとしたが、宗教界では十分な賛同を得られなかった。しかし、宗務院総監のトルストイは彼を強力に支持した。国民教育相でもあったトルストイは、正教の布教を文明化として捉えていたが、⁽²⁰⁾そのためロシア語による初等教育が必須であるとは考えていなかったのである。彼はイリミンスキーの提案する神学校が異族人教育に有効であるとして評価していた。⁽²¹⁾

イリミンスキーにとって大切なのは、洗礼を受けた人々のアイデンティティをムスリムのタタール人から分離することであつて、そのアイデンティティをロシア人のそれに近づけることではなかった。イリミンスキーは改宗者に民族的アイデンティティを維持させ、後の世代の改宗など正教会のために用いさせようとしたのである。それゆえイリミンスキーには人種の混淆によつてロシア化を進めるといふ発想はなかった。イリミンスキーやその思想の実践者たちは改宗の結果として異人種間結婚が生じることを望んではいなかった。改宗者は同じ人種間で結婚したほうがよいと考えていたのである。⁽²²⁾

これに対して、文明化に最大の関心を持ち、同時に人種的混淆の問題を重視したのがシチャールポフである。ロシア人聖職者の父とブリヤートの母との間に生まれたシチャールポフは、シベリア地方主義の始祖とみなされる存在である。⁽²³⁾ チェルヌイシエフスキーをはじめとして、一八六〇年代の政治的急進派には聖職者身分の出身者が少なくなかったが、シチャールポフもしばしば反体制運動への関与を疑われた。最初に逮捕されたのは一八六一年である。聖職者としての教育を受けていたシチャールポフは、このとき、カザン大学の講師として、特に分離派に注目する立場からロシア史を講じていた。四月一六日、農奴制の廃止に伴って起きたベズナ村の騒擾について追悼集会で演説した彼は、騒擾の指導者をイエスになぞらえ、キリストの教えは民主主義的であると述べたために、アレクサンドル二世の命により逮捕されることになった。⁽²⁴⁾

宗務院はシチャーポフを白海沿岸のソロヴェツキー修道院に送ることを決定したが、彼の地方改革に関する意見書に興味を持っていた内相ヴァルーエフは決定を取り消させ、自由な勤務条件を与えて内務省で分離派に関する事に従事させている。⁽²⁵⁾ 勤務は長くは続かなかったが、その後も積極的な反体制活動を行ったわけではない。要注意人物として警察からマークされており、逮捕されることもあったが、その都度無罪になっている。

シチャーポフの政治的見解は一貫性を欠いていた。中央ロシアとシベリアの相違に注目し、連邦主義的な傾向を持つシチャーポフの思想は初期スラヴ派に通じるものを持っている。⁽²⁶⁾ 他方でシチャーポフは植民者としての大口シア人の同化能力に対して高い評価を与えており、ロシア人による征服がブリヤート人やヤクート人にとつてもよいことであると考えていた。⁽²⁷⁾ 異族人にとつて「文明化」が好ましいと考えることについてはシチャーポフも当時の他の知識人と違いがなかった。文明と未開という二項対立や、それに基づく異族人という存在の意義の否定は、この時代には政治的にリベラルであることと矛盾しなかつたのである。それゆえ、シチャーポフはときに、スラヴ派の嫌うロシアの中央集権を積極的に評価した。ヨーロッパ国家への統合が未開の異族人に文明の恩恵を及ぼすと考えたからである。⁽²⁸⁾

ブリヤートとロシア人の間に生まれたシチャーポフには、単なる異族人のロシア化ではなく、シベリア人という新しい範疇ができることへの期待があつた。シベリア人は、文明化された人々であるべきだったが、人種的に純粋なロシア人である必要はなかつた。アジアとヨーロッパの交差点であるロシアにはもともとスラヴ、フィン、トルコ、モンゴルという四つの人種があり、混血によって新しい人種が生まれていた。特に環境の厳しいシベリアは人種変容の実験室であつた。シチャーポフは人種混雑を視野に入れて文明化を考えていたと言ふことができる。⁽²⁹⁾

しかしシチャーポフの場合、人種の混雑への期待は必ずしもブリヤートに対する積極的評価に基づくものではな

かった。シチャーポフは、人種と文明化の水準との間には密接な関係があると考えていた。文明化の水準に序列がある以上、人種に序列があることを否定するのは困難であった。しかも彼は脳の大きさと文明化の水準との間に直接の相関関係を見出し、異族人は神経や脳の発達が遅れていると考えていた。⁽³⁰⁾ 文化水準の優劣は疑似的な自然科学によつて説明されたのである。⁽³¹⁾

四 ヴェニアミンの宣教方針

ヴェニアミンは、異族人という存在にこだわろうとはしなかった。ヴェニアミンから見れば、ロシア語ができる受洗ブリヤートは、人種に関わりなく立派な帝国臣民であった。彼は改宗したブリヤートにもととのアイデンティティを捨てさせ、彼らをロシア人にすることを目指した。ロシア人名を与え、衣服や髪形もロシア風にしようとしたのである。このような立場に立つヴェニアミンには、イリミンスキーのやり方に賛成することはできなかった。⁽³²⁾ 六〇年代に彼がイリミンスキーに宛てて書いた手紙は、二人の間に根本的な不一致があったことをよく示している。ヴェニアミンにとつて、ブリヤート語による宣教は必ずしも好ましいことではなく、モンゴル語やブリヤート語の聖書や祈禱書を導入することがよい結果を生むとも考えられなかった。現地語や翻訳に依拠することは、それによつて正教を学ぶブリヤートの間に、自分たちはロシア人とは別のものであるという意識を育てることになる。ブリヤート語で宗教生活を送る改宗者は、ブリヤート社会からは分離しているがなおロシア人社会とは結びついておらず、別個の社会を作るようになる。その数が増えるほど、彼らのロシア化は困難になるであろう。⁽³³⁾

しかし、当時、正教文書の現地語への翻訳は先住民への伝道方法として広く受け入れられていた。ザバイカル宣教の先駆者であるニール大主教もこれに熱心であったし、また、当時カムチャトカ大主教であったインノケンテ

イーは、一八六一年九月、日本での伝道を開始していたニコライに箱館で会った際、専心日本語を学ぶべきであるとし、聖書と祈禱書を日本語に翻訳して正教精神の土着化を図るよう勧めている。⁽³⁴⁾ それゆえロシア語にこだわるヴェニアミンの立場は必ずしも広く支持されていたわけではない。かつてイルクーツク主教であったニールはヴェニアミンが現地語を勤行に使用しないことに対して腹を立てていたという。

ヴェニアミンにとつて何にもまして重要なのはラマの影響を排除することであった。そのためにはブリヤートにできるだけ早くキリスト教の洗礼を受けさせるべきである。たとえその精神にシャーマニズムが残存していても、ブリヤートにキリスト教の洗礼を授けることは一向に差し支えなかった。洗礼を受けるに値する人間とそうでない人間を区別するのは神であり、誰が洗礼に値するかは宣教団が判断すべきことではない。むしろ洗礼を望む者を異教徒のまま死なせることが重大な罪であった。かつてロシア人がキリスト教の洗礼を受けたとき、その精神には異教的なものが色濃く残っていたが、教育によってそれを排除することを優先させていたら、ロシア人はムスリムや仏教徒になっていたであろうとされる。⁽³⁵⁾

このようにブリヤートの洗礼を急ぐヴェニアミンの立場は、当然のことながらシチャーポフとも異なっていた。聖職者身分の出身でありながらブリヤートへの宣教に対して懐疑的であったシチャーポフは、表面的に正教を受け入れたところでブリヤートにとつては何の利益もなく、彼らの文化水準を上げることもつながらないと考えていた。⁽³⁶⁾ しかしヴェニアミンにとつて、シチャーポフが求めるような啓蒙を目的とした学校教育は決して望ましいものではなかった。啓蒙による普遍的教育の普及にこだわるのは忌むべき進歩主義でありニヒリズムである。ブリヤートへの教育は宗教教育と一体でなければならず、洗礼を受けた者に対してのみ行われるべきであった。⁽³⁷⁾ 一八六二年、ヴェニアミン主教はポソリスキー修道院付属の学校を開き、一八六四年、それを伝道協会の資金で運営される神学

校に再編した。ザバイカル宣教師団の活動拠点がチタに移った一八八〇年以後、この学校は基本的に修道院が自前で運営せねばならなくなったが、それでも一八九二年まで存続し、多くの教師や聖職者を養成した。⁽³⁸⁾

ヴェニアミンのブリヤートとの関わりは、一八六〇年代の終わりから一八七〇年代にかけて一時中断する。一八六八年、カムチャトカ大主教インノケンティイがモスクワ府主教になる際、宗務院に対して後任にヴェニアミンを推薦したからである。一八六八年三月、ヴェニアミンは二代目のカムチャトカ主教になった。ブラゴヴェシチェンスクに移ったヴェニアミンは、以後五年にわたり、極東への伝道に献身する。一八七〇年、アレウト主教区が独立し、残った部分は「カムチャトカ・クリル・ブラゴヴェシチェンスク主教区」と改称された。一八七一年、ブラゴヴェシチェンスクに神学校が開かれるにあたっては、ヴェニアミンも直接関与している。⁽³⁹⁾ 先住民の同化に関する彼の考え方はここでも変わらなかった。この年、イリミンスキーに宛てた手紙の中で、ヴェニアミンは、受洗ヤクト人や受洗ツングース人と呼ぶことは彼らに対する侮辱であると述べている。⁽⁴⁰⁾

一八七三年三月、ヴェニアミンは、二か月前に亡くなったパルフェーニーに代わってイルクーツク主教になり、再びブリヤートへの宣教に携わることになった。一八七八年四月には大主教に昇叙される。翌一八七九年、勅令によりセレンギンスク主教座がポソリスキー修道院からチタに移った。これによってポソリスキー修道院はザバイカリエ宣教の拠点としての役割を終えたのである。

五 一八八〇年代のヴェニアミン

一八八〇年四月、ポベドノスツェフが宗務院総監になった。ポベドノスツェフもまたイリミンスキーの支持者であった。⁽⁴¹⁾ ポベドノスツェフにとって正教会に属することはロシア帝国臣民であることと同義であったが、それに比

べれば言語の違いは重要ではなかった。ポベドノスツェフは啓蒙Ⅱ文明化に対して懐疑的であり、世俗的な教育を嫌っていたが、同時にロシア人を特別扱いしたり均一のロシア文化への同化を求めたりする発想も彼にはなかったのである。アレクサンドル三世の関心も、基本的に民族としてのロシア人というよりはロシア帝国という容器とそれを支えるものに対して向けられていた。彼は異族人の存在を認め、帝国の中にその居場所を与えようとしていた。このような事情のもと、八〇年代にはイリミンスキー・システムがロシア帝国の東方边境政策を基礎づけていた。

ヴェニアミンは依然としてイリミンスキーに与しなかった。彼は改宗した異族人を特別扱いすることに対して批判的であった。異族人を子どものように甘やかすべきではなかった。ヴェニアミンはより純粋なロシア化を求めており、異族人の自意識を育てることで、異族人のみを対象とする立法に対しても批判的であった。⁽⁴²⁾ 現地語の扱いについても確固たる態度をとることができなかった。一八八六年、ポベドノスツェフに宛てた書簡の中で、イリミンスキーは、ヴェニアミンが語学の才能を欠いており、さまざまな翻訳の間で動揺していると述べ、イルクーツク主教区では翻訳の問題が今にいたるまで決着を見ていないとした。⁽⁴³⁾

ヴェニアミンとイリミンスキーの間にあつたこのような立場の違いは、先住民の同化やロシア帝国臣民の条件に関する基本的な認識の違いに加え、沿ヴォルガのイスラムとザバイカリエの仏教が持つ政治的重要性の違いによるところも少なくなかったであろう。シベリアの場合、首都の関心を惹いていたのは異族人の改宗に対する抵抗の問題よりもむしろ政治的分離主義を伴う反体制派の活動であった。⁽⁴⁴⁾

一八六〇年代以降、シチャーポフを継承したH・M・ヤドリントツェフらによってシベリア地方主義の考え方が形成されており、一八八二年に出たヤドリントツェフの著書ともいべき『植民地としてのシベリア』が広く注目を集めていた。ヴェニアミンはトムスク主教ヴラジーミル（俗名И・П・ペトロフ、一八二八―一九七年）に宛てた

手紙の中でこの本に触れ、読んでいないし読むつもりもないと述べている。⁽⁴⁵⁾ ヤドリンツェフは、聖職者を低く評価するなど、宣教活動に対して好意的ではなかったのである。⁽⁴⁶⁾ しかし、この本の中でヤドリンツェフも指摘しているように、ブリヤートに対する宣教活動は以前にも増して困難になっていた。その背景には、ムラヴィヨフの跡を継ぎ、一八七一年から七三年にかけて東シベリア総督を務めたH・II・シネリニコフが、寺院を破壊するなどブリヤートに対して非寛容な政策をとったことがある。⁽⁴⁷⁾ そのためブリヤートは固い守りの姿勢をとるにいたっていたのである。

ヴェニアミンは行政当局の協力を求めた。正教を広め、異族人社会をラマの影響から切り離すことは国家的課題であり、現地の行政当局が積極的に取り組むべきことである。それは良心の問題への世俗権力の干渉には当たらないとヴェニアミンは考えていた。ヴェニアミンの見るところ、ブリヤートは洗礼を受けていないだけでキリスト教を受け入れているのであり、行政当局の後押しがあれば容易に洗礼を受けるはずだからである。⁽⁴⁸⁾ しかし、一八八〇年代の前半に東シベリア総督を務めたII・Γ・アヌーチンは、地域の秩序を維持するためにブリヤートの社会組織を尊重しないわけにはいかなかった。地域の軍事的・戦略的重要性からも、社会関係の安定を脅かすことのないよう配慮が必要であった。それもあつて彼は摩擦を最小化しようとする、ブリヤートへの伝道に対しても非協力的であった。⁽⁴⁹⁾ ヴェニアミンはアヌーチンが宗教に関心のない自由主義者・ニヒリストであるとしている。⁽⁵⁰⁾

受洗ブリヤートに対するアヌーチンの態度もヴェニアミンを満足させなかった。ヴェニアミンは受洗ブリヤートが異族人社会の中で酵母の役割を果たすことを期待していた。それにも拘らず、実際には彼らは困難な状況に置かれていた。少数者である受洗ブリヤートは自治機関であるステップ・ドゥーマの中で十分に代表されず、不利益を被っていたのである。ヴェニアミンにとって、受洗ブリヤートの状況を改善するには彼らが自治機関の中でしかる

べき地位に就く必要があり、一旦その地位に就いたら異教徒がとって代わることは禁じられなければならない。異族人自治の尊重は絶対ではなく、かつてシネリニコフ総督がやったように、受洗ブリヤートがステップ・ドゥーマの中で地位を確保するために当局が介入できるよう、立法措置が講じられることが望ましかった。⁽⁵¹⁾しかし、総督府はそれを積極的に進めようとはしないどころか妨げさえした。⁽⁵²⁾行政当局が受洗ブリヤートを自治機関の中に押し込めば、改宗していない者の目には改宗者と当局が一体化して映り、社会関係を混乱させるおそれがあったからである。

ヴェニアミンの不満は、セメイスキー（古儀式派）への態度をめぐっても現れた。セメイスキーは概して知的で勤勉であり、保守的であるだけに純粹な大ロシア人の特質をよく保つ人々とみなされていた。人材難に苦しむ行政当局にはセメイスキーの宗教的な問題に必要以上にこだわる理由はなく、開拓民としての能力のほうが重要であった。⁽⁵³⁾一八八〇年代の初め、ザバイカル州軍務知事のП・И・イリヤシェヴィチは、監獄制度に関する調査旅行の途中でチタを訪れた旧知のМ・Н・ガルキン＝ヴラスキーに、セメイスキーに農業指導を行わせることによってブリヤートの定住化を促すという考えを語っている。⁽⁵⁴⁾

行政当局のセメイスキーに対する宥和的態度をヴェニアミンは苦々しく思っていた。ヴェニアミンの見るところでは、古儀式派という分離派の存在は異族人にロシア人の一体性を疑わせ、彼らの改宗を促す上で障害になる。しかし、ピョートル以前のロシアを理想とする分離派に現在のロシアを受け入れさせ、自らが真の正教徒であるという固い信念を持つ彼らを正教会に復帰させるには、宣教団の説く言葉は無力であり、国家の助けが不可欠であった。ロシアの国家と教会は一体であり、分離派の問題に行政当局が無関心でいてよいはずはない。ヴェニアミンにとつて、受洗ブリヤートの擁護と同様、分離派の正教会への復帰に対しても行政当局が積極的な役割を果たすべきであ

つた。⁽⁵⁵⁾

一八八五年七月から八月にかけ、ヴェニアミンはシベリアの主教区を預かる七人の主教をイルクーツクに集めて会議を開き、多くの異族人を抱えたシベリアにおける宣教活動の強化について議論している。⁽⁵⁶⁾しかし、ザバイカリエに関する限り、会議での議論が成果を生むことはなかった。一八八六年、ザバイカリエを旅行したE・E・ウフトムスキーは、この地の宣教活動が全くうまく行っていないことを内務省の外国宗教局に報告している。⁽⁵⁷⁾

一八八四年六月、宣教活動に重大な影響を及ぼす行政措置が行われた。新たにプリアムール総督府が新設され、ザバイカル州がその管轄下に入ったのである。ザバイカル州を東シベリア総督府の管轄から外し、アムール州などとともに新しい総督府のもとに置くことは、多くの人によって支持されていた。⁽⁵⁸⁾カザークに依存するザバイカル州は、軍事力の形態においてイルクーツク県以西とは著しく異なっていたし、中央ロシアとの交通においても困難を抱えていたからである。極東の安全保障戦略においてもこれは合理的であった。当時のロシアはなお清帝国の脅威を感じていたから、バイカル湖以東の清との国境を一括管理する必要があったのである。

それにも拘らず、ポボドノスツェフはザバイカル州とイルクーツク県を切り離すことに賛成していなかった。⁽⁵⁹⁾同じ住民構成を持つ二つの地域を行政的に切り離すことはブリヤート問題の処理を難しくすると考えられたのである。ザバイカル州とイルクーツク県は同じ主教区を構成していたから、これらが別の総督府の管轄下に置かれたことは宣教活動にも影響を及ぼすはずであった。

一八八六年、ヴェニアミンはアレクサンドル三世に拝謁して宣教の困難を訴え、その甲斐あって仏教に対する行政的介入が強められることになった。一八五三年規程では東シベリア全体のラマガンディド・ハンボ・ラマの管轄下に置かれることとなっていたが、一八八九年七月二〇日の大臣委員会決定に基づいて一八九〇年七月に出され

た暫定訓令により、バンディド・ハンボ・ラマの管轄はザバイカル州に限定され、イルクーツク県のラマに対する監督はその管轄から外れてイルクーツク総督に委ねられることになった。⁽⁶⁰⁾ 宗教的権限の及ぶ範囲が行政区画に一致させられるとともに、イルクーツク県に関しては仏教徒の宗教的自治が否定されたのである。

それでもザバイカル州に関しては、仏教界に相対的自律の余地が残されており、ザバイカル州を管轄することになったプリアムール総督の A・H・コルフも、アヌーチンと同様、宣教活動に協力的であるとは言い難かった。宣教団を指導するヴェニアミンとプリアムール総督との摩擦は深刻であった。⁽⁶¹⁾ ヴェニアミンの側に立つポベドノスツエフは、コルフ総督とグリーリー・カムチャトカ主教（一八八五年就任、俗名 C・B・ブルタソフスキー、一八四五—一九〇七年）やヴェニアミン・イルクーツク大主教との角逐は、ドイツ人や、ロシアの国民や歴史との精神的絆を欠いたロシア人が官房で辺境の宗教問題を処理したのが原因であると主張している。⁽⁶²⁾

六 おわりに

イリミンスキー・システムが厳しい批判にさらされるようになるのは一八九一年二月に彼が死んでからであるが、見直しそのものはそれ以前から進んでいた。⁽⁶³⁾ イリミンスキー・システムを採用し、それに従ってさまざまな試みを行っていたカムチャトカ主教区でも、一八九一年、主教区委員会の決定により、異族人の教育はロシア語のみによって行われることになった。二〇世紀初頭にはイリミンスキー・システムが全面的に放棄された。⁽⁶⁵⁾ 現地語の教育に消極的であったヴェニアミンはこの方向性を先取りしていたことになる。⁽⁶⁶⁾

しかし、力を失ったのはイリミンスキー・システムだけではなかった。宗教による同化の試みそのものが時代にそぐわなくなっていた。改宗促進が政策として重視されなくなり、宣教団の威信は低下しつつあった。⁽⁶⁷⁾ 一八九二年

二月初め、ヴェニアミン自身もイルクーツクで没している。一八九四年にはザバイカル主教区がイルクーツク主教区から独立し、セレンギンスク副主教区が廃止された。これを宣教活動への支援とみる見方もあるが、⁽⁶⁸⁾ 広大な主教区の宗務全体を統括しつつ団長を兼務することになったザバイカル主教に、宣教団の活動に対して十分な注意を向けることは困難であった。一九〇五年革命を経て信教の自由が認められる前でさえ、ザバイカル州のブリヤートは九割以上が仏教徒のままだったのであり、宣教活動が十分な成果を収めたとは言い難い。洗礼を受けたブリヤートもその実態は多様であった。⁽⁶⁹⁾

一八九四年六月にはシベリア地方主義の代表的歴史家・民族誌学者であったヤドリントンツェフも世を去る。ヤドリントンツェフが反対したシベリア横断鉄道の建設が始まってから三年後のことであった。ヤドリントンツェフが鉄道の建設に反対したのは、それがシベリアと中央ロシアのつながりを強め、シベリアの自律や地域的特色を弱めると考えたからである。⁽⁷⁰⁾ 事実、シベリア横断鉄道は大量のロシア人移住者をシベリアに送り込み、シベリア人というアイデンティティを維持することは徐々に困難になっていった。他方でブリヤート人やヤクート人の知識層の間で民族意識が鮮明になり、自治の要求が現れるようになる。⁽⁷¹⁾ シベリア人の理念が全く消え去ってしまったわけではないにしても、⁽⁷²⁾ 一八六〇年代から続けられてきたシベリア地方主義の運動は、ザバイカリエでの正教会の宣教活動と同様、一つの段階を終えることになるのである。

(1) *Венямин. Жизненные вопросы Православной миссии в Сибири*, СПб., 1885, С. 3.

(2) ロシア帝国において先住民統治の基本的枠組みを作ったスペランスキーもそのように考えていた。以下を参照。

Marc Raeff, *Michael Speransky: Statesman of Imperial Russia, 1772-1839* (The Hague, 1957), p. 342.

(69) *Mikhailov T.M. Влияние ламазма и христианства на шаманизм бурт // Христианство и ламазм у коренного населения*

- Сибирь (являя половина XIX - начало XX в.) Д., 1979. С. 128; N. Abaev. L. Abaeva. "The Buddhist Conquest of Transbaikalia," in *Buddhism in Buryatia* (Ulan-Ude, 1998), pp. 22-23.
- (4) *Ibid.*, pp. 24-25.
- (5) *Ibid.*, p. 25.
- (6) 若松寛「ブリヤートのラマ教」『京都府立大学学術報告 人文』第二八号（一九七六年）、二頁。
- (7) *Tsvetnenko A.V., Kozminin V.II. Посольский Спасо-Преображенский монастырь на Байкале. Улан-Удэ, 2013. С. 11-12, 27.*
- (8) 伊賀上菜穂「南シベリアの古儀式派教徒セメイスキー」阪本秀昭・中澤敦夫編『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』(明石書店、二〇一九年)二二九—二四三頁。
- (9) *Михайлов. Указ. соч. С. 137.*
- (10) Raelf. *op. cit.*, pp. 255-256. スベランスキーは仏教をはじめとするブリヤートの伝統や哲学にも関心を寄せた。
- (11) Полное собрание законов Российской империи. Собр. 1-е. Т. 38. СПб., 1830. С. 394-417 (№ 29126).
- (12) *Галиндобаева В.В., Карбачинев Н.И.* Кармы и метисы. Социокультурные практики метисации в Бурятии // *Сибирский сборник-4. Грани социального: Антропологические перспективы исследования социальных отношений и культуры.* СПб., 2014. С. 433-434. 伊賀上菜穂「洗礼ブリヤート」から「ロシア人」へ——ブリヤート共和国一村落に見る帝政末期正教化政策と々の結果（特集）「2004年度大会」『ロシア史研究』第七六号（二〇〇五年五月）、一二二頁も参照。
- (13) 原暉之「シベリアにおける民族的諸関係——南シベリア遊牧民地帯を中心に」『史苑』第四二巻第一・二号（一九八二年五月）、一六頁。Abaev and Abaeva. *op. cit.*, p. 28; Dittmar Schotkowitz, "The Orthodox Church, Lamaism, and Shamanism among the Buryats and Kalmyks, 1825-1925," in: Robert P. Geraci and Michael Klapodarkovsky (eds.), *Of Religion and Empire: Missions, Conversion, and Toleration in Tsarist Russia* (Ithaca, New York, 2001), p. 205.
- (14) Ламанз в Бурятии XVIII-начала XX века. Структура и социальная роль культурной системы. Новосибирск, 1983. С. 32.
- (15) *Азиатская Россия. Т. 1. Люди и порядки за Уралом.* СПб., 1914. С. 215.
- (16) 宣教活動はバイカル湖の西のほうが容易であった。ザバイカリエからのチベット仏教の影響が西部に及ぶのを遮断しようという宣教団の試みはかなりの程度成功し、それは言語にも及んだ。モンゴメリーは戦闘的なヴェニアミンに指導さ

- れた正教の宣教活動が大部分の西部ブリヤートからモンゴル語の読み書きを身につける機会を奪ったとしてゐる (Robert W. Montgomery, *Late Tsarist and Early Soviet Nationality and Cultural Policy: The Buryats and Their Language* (Lampeter, Careidigion, Wales, 2005), pp. 117-118)。
- (17) Schorkowitz, op. cit., p. 211.
- (18) Yuri Slezkine, "Savage Christians or Unorthodox Russians?: The Missionary Dilemma in Siberia," in: Galya Dimant and Yuri Slezkine (eds.), *Between Heaven and Hell: The Myth of Siberia in Russian Culture* (New York, New York, 1993), pp. 19-20.
- (19) 西山克典「イリミンスキー体系の成立によせて(一八五八—一八六七年)——ヴォルガ中流・ウラル地域における『棄教』のなかで」『北大法学』第五八号(二〇一八年二月)、六八一—七〇頁。
- (20) 一八六六年九月、トルストイはカザンで演説し、「ロシアに相応しい東方の征服とは文明化という征服であり、それは最も強固で最も安価な征服である」と述べている。奥村庸一「19世紀ロシア民衆教育改革の性格について——対東方民族『異族人教育規則』(1870)の検討」『教育史学会紀要・日本の教育史学』第三九集(一九九六年一〇月)、二三—六頁。
- (21) 西山「前掲」七〇頁。Slezkine, "Savage Christians or Unorthodox Russians?," p. 22; Robert P. Geraci, *Window on the East: National and Imperial Identities in Late Tsarist Russia* (Ithaca, New York, 2009), pp. 67-68.
- (22) *Ibid.*, pp. 74-75.
- (23) シベリア地方主義については、渡邊日日「シベリア地方主義と『女性問題』——シャシコフの評価をめぐって」永山ゆかり・吉田陸編『アジアとしてのシベリア——ロシアの中のシベリア先住民世界』(勉誠出版、二〇一八年) 八三—八四頁を参照。
- (24) 西山「前掲」七三頁。逮捕にいたる経緯については島田孝夫「シチャーフおよびカザン大学生サークルとベズナ蜂起——農民追悼集会をめぐって」『ロシア史研究』第三四号(一九八一年)、一七一—一九頁に詳しい。
- (25) *Апуное Н. Я. Афанасий Прокофьевич Уланов. СПб., 1883. С. 69.*
- (26) Dimitri Sergius von Mohrenschildt, *Toward a United States of Russia: Plans and Projects of Federal Reconstruction*

- of Russia in the Nineteenth Century* (Rutherford, 1981), pp. 65-67.
- (27) *Ibid.*, p. 69.
- (28) *Ibid.*, pp. 72-73.
- (29) David Rainbow, "Racial 'Degeneration' and Siberian Regionalism in the Late Imperial Period," in: David Rainbow (ed.), *Ideologies of Race: Imperial Russia and the Soviet Union in Global Context* (McGill, 2019), pp. 182-184. ヤーンソン(John J. Yananson)の議論を継承・発展させた。(Ibid., pp. 180-181)。
- (30) *Ibid.*, pp. 184-185; Yuri Slezkine, *Arctic Mirrors: Russia and the Small Peoples of the North* (Ithaca, New York, 1996), p. 118.
- (31) Mohrnschildt, op. cit., pp. 73-75.
- (32) О христианском просвещении инородцев. Переписка архиепископа Вениамина Иркутского с Н.И. Ильминским // Православный собеседник. 1905. Июль-август. С. 1-38. Geraci, op. cit., p. 73. サハリアンムの宣教方針については以下も参照。Slezkine, "Savage Christians or Unorthodox Russians?," pp. 23-24.
- (33) О христианском просвещении инородцев. С. 13.
- (34) 牛丸康夫『明治文化とニコライ』(教文館、一九六九年)二四、三〇頁。一八七九年にインノケンテイーが亡くなったとき、ニコライは日記の中でその死を悼み、彼を「日本宣教団の忘れ得ぬ支持者で恩人」と呼んでいる(中村健之介編訳『宣教師ニコライの日記抄』(北海道大学図書刊行会、二〇〇〇年)、五一―五二頁)。
- (35) Там же. С. 14.
- (36) Ядринцев Н.М. Сибирь как колония. СПб., 1882. С. 116.
- (37) О христианском просвещении инородцев. С. 12-13.
- (38) Тиваненко и Коллинши. Указ. соч. С. 72-73.
- (39) История Благовещенска 1856-1917. Т. 1. Благовещенск-на-Амуре, 2009, С. 108. 一八七二年には日本を訪問し「日本宣教団に会つて」(Словарь упоминаемых лиц // Собрание трудов равноапостольного Николая Японского. Т. 1. М., 2018, С. 455)。

- (40) О христианском просвещении инородцев. С. 21.
- (41) Gerasi. *Window on the East*, p. 69.
- (42) *Венямин*. Указ. соч. С. 16. 今の点でサハリン人の立場は完全なロシア化による異族人の消滅を求めた M・A・シロフエフに近づくと言わなければならない。Slezkine, *Arctic Myths*, p. 120 を参照。シロフエフはヤドリリンツェフと同様、移住したロシア人が異族人と接触した結果むしろ異族人化したとして、これを嘆息する (*Миротьев М.А. О положении русских инородцев*. СПб., 1901. С. 291-297)。
- (43) Харламович К. Предисловие к "О христианском просвещении инородцев" // Православный собеседник. 1905. Июль-август. С. 3-4.
- (44) *Ремнев А.В.* Россия Дальнего Востока. Имперская география власти XIX - начала XX веков. Омск, 2004. С. 61-62; *Половцов А.А.* Дневник государственного секретаря в двух томах. Т. 1. М., 2005. С. 413, 585.
- (45) Письма Венямина, архиепископа Иркутского, к Казанскому архиепископу Владимиру. М., 1913. С. 159-160.
- (46) *Яворницев*. Указ. соч. С. 116.
- (47) Schotkowski. op. cit., pp. 206-207; *Цыремпилов Н.В.* Буддизм и империя. Бурятская буддийская община в России (XVIII-нач. XX в.). Улан-Удэ, 2013. С. 174-175.
- (48) *Венямин*. Указ. соч. С. 19-20.
- (49) Письма Венямина. С. 162.
- (50) Там же. С. 170.
- (51) *Венямин*. Указ. соч. С. 36, 43.
- (52) Письма Венямина. С. 168-170. Трлстой内相も関心を示さなかった (Там же. С. 174)。
- (53) *Ремнев*. Указ. соч. С. 54-55. 向うした傾向は、インノケンティー大主教をはじめ、正教の聖職者においてなえ珍しくなかったとされる。シベリアで知的な人材に対する需要を満たすことは容易でなかった (*Яворницев*. Указ. соч. С. 117)。後に歴史家として大きな業績を残す A・A・コロニーロフは、ストールヴェの『解放』編集部に参加するなどリベラルな政治信条を持った人であるが、一九〇〇年までイルクーツク総督府で農民・移住問題についての調査に携わっている。

- (47) Галкин-Враской М.Н. Поездка в Сибирь и на острон Сахалин в 1881–1882 гг. Из путевого дневника // Русская старина. 1901. Т. 105. № 1. С. 188–189.
- (48) Вениамин. Указ. соч. С. 10–13.
- (49) Всеобщий отчет обер-прокурора Святейшего синода К. Победоносцева по ведомству православного исповедания за 1885 г. СПб., 1887. С. 27–28.
- (50) David Schimpreppinck van der Oude. *Toward the Rising Sun: Russian Ideologies of Empire and the Path to War with Japan* (DeKalb, Ill., 2001), pp. 46–47. トリヤートに対し好意的であったウフトムスキーは「ヴェニヤミンの強引な宣教方法を強く批判」している。
- (51) Галкин-Враской. Указ. соч. С. 193.
- (52) Ремнев. Указ. соч. С. 278.
- (53) Церемитлов. Указ. соч. С. 197.
- (54) Письма Вениамина. С. 184; Schotkowitz, op. cit., p. 213.
- (55) Ремнев. Указ. соч. С. 278.
- (56) Paul W. Werth. *At the Margins of Orthodoxy: Mission, Governance, and Confessional Politics in Russia's Volga-Kama Region, 1827-1905* (Ithaca, New York, 2001), p. 232.
- (57) Slezkine, "Savage Christians or Unorthodox Russians?," p. 25.
- (58) Сем Ю.А. Христианизация нанайцев, ее методы и результаты // Христианство и ламанизм у коренного населения Сибири (вторая половина XIX - начало XX в.). Л., 1979. С. 222.
- (59) Харламович. Указ. соч. С. 4.
- (60) 原「前掲」一八頁。Slezkine, "Savage Christians or Unorthodox Russians?," pp. 25–27.
- (61) Schotkowitz, op. cit., p. 213.
- (62) 伊賀上「『洗礼ブリヤート』から『ロシア人』へ」二二〇頁。
- (63) Mohrenschildt, op. cit., pp. 116–117.

- (71) Rainbow, op. cit., p. 198.
(72) Ibid., p. 201.